



娘のみた文豪の生と死

トルストイ

タチヤーナ・トルスタヤ 木村 浩／関谷苑子 訳

WEB TONCTION

トルストイ

娘のみた文豪の生と死
タチヤーナ・トルスタヤ 木村 浩／関谷苑子 訳



TBSフタニカ

木村 浩 (きむら ひろし)

1925年東京に生まれる。東京外国語大学卒業。専攻ロシア文学。著書・訳書に『ソビエトざっくばらん』(新潮社),『ロシア文学の周辺』(読売新聞社),トルストイ著『アンナ・カレーニナ』(新潮社),ソルジェニーツィン著『収容所群島』(新潮社)ほか多数。

関谷 苑子 (せきや そのこ)

1947年生まれ。早稲田大学大学院博士課程修了。専攻フランス文学。現在、津田塾大学講師。

トルストイ——娘のみた文豪の生と死

1977年9月15日 初版発行

訳 者——木村 浩・関谷苑子

発行者——吉田 稔

発行所——株式会社ティビーエス・ブリタニカ

東京都千代田区三番町28番地1 秀和三番町ビル

郵便番号102 電話 (03) 230-0311

振替東京1—131334

印 刷——祥文堂印刷所

製 本——小高製本

© Hiroshi Kimura, Sonoko Sekiya, 1977

0023-200019-4968

落丁・乱丁本はお取替えいたします

トルストイ——娘のみた文豪の生と死

目次

第一章 幼年時代

31

父の落馬事故 タチャーナという名前 質素な生活 仮面舞踏会 乳母マリヤ 家庭教師ハンナの到着 ハンナの献身 母の生活 △子供部屋のトルストイ 父の童話 父の友人たち 私のきょうだいたち 『ライネケ・フックス』の狼〈猩紅熱〉にかかる 〈犬の家庭教師〉 愛犬ミルカ タチャーナ・アレクサンドロヴナと父 父の文学関心 いとこのヴァーリヤ 妹マーシャの誕生 〈大きい組〉と〈小さい組〉 ライ麦のひばり 私とイリヤの冒険 ギリシア語と取り組むトルストイ 〈回転ブランコ〉 『初等読本』 一八七一年のクリスマス お客さまの到着 クリスマス・ツリーの下で 仮装祭 お祭り騒ぎの後で…… トルストイ〈学校〉を開く ハンナの病氣 夏休み クズミンスキー一家の到着 さよなら幼年時代

第二章 少女時代

116

ドイツ語を習う 孤独と不安のなかで ハンナからの手紙 新しい家庭教師 教育者トルストイ ダーシャの死 サマールへの旅 ヴォルガの船旅 〈ヘステップ〉を走る 夏を過ごす家 パシキール人の村 馬と遊ぶ ハンナとの再会 クムイス療法 小羊モーチカ タタール人の一家 スキタイ人の墓 洞窟の隠者 祭りの日 草競馬 夏休みは終わった ハンナの結婚 ヤースナヤ・ポリャーナでの新学期 初めての死 「愛という鍵を持たない者は……」

第三章 思い出すまま

171

トルストイの生家 『戦争と平和』のモデル 『ボスレドニク叢書』 チェーホフとトルストイ 洒落 自転車 女性恐怖症 〈小さな緑の杖〉 父はいつ女を理解したか 〈サ

モワールンは盗まれない ひな鳥 トルストイ、チップをもらう 迷信家トルストイ？
煙に巻く 矛盾 ヤースナヤ・ポリャーナの白痴女 『イタリアのむぎわら帽子』 『デ
ヴィッド・コバーフィールド』 うんざりさせる技術 泥棒ガニーニャ トランプ占い
労働者と歌手 トルストイのくしゃみ パオロ・トゥルベツコイ 狂人とトルストイ
△「八」という数字 きりのような眼 母の笑い 憲兵 ショパンのワルツ 死が怖い者
は…… トルストイ信者 「全くあなたは礼儀知らずだ……」 「おまえよりばかなの
か」 自然の法則に従う生活 ムジークと父 トルストイの貴婦人 「僕の持っている
ものをすべて愛する」

第四章 父の死とその家出について

真実を話すとき 若き日のトルストイ 結婚にすべてをかけた母 〈回心〉までの幸福
な生活 ソフィヤこそ僕に必要なんだ…… 私は彼にはなれないだろう…… 〈回心〉の
兆し 正教会への決別 家族はどう受けとめたか 「求める者に与えよ」 『さらばわれ
ら何をなすべきか』 「僕は君と別れたい……」 「あなたを殺してやる……」 つかの間
の相寄り 財産と著作権の放棄 野良仕事に励む 末っ子ヴァーニャの死 すべてが私
を見捨てるのです…… 理想と現実の狭間で 僕たちの道は二つに分かれてしまった
妻の嫉妬とエゴイズム 秘密の日記 遺言状をめぐって 逃げ出したい、消えてしま
いたい ついに家を出る さようなら、ありがとう 最後の言葉

母の思い出……………タチヤーナ・アルベルティニー

原注……………298

解説……………木村 浩

序文

ダニエル・ジレス

人間トルストイの、けたはずれな濃密さ、しかも確固たる自信と動揺が共存し、威圧的であつ誠意にあふれ、輝くばかりの魅力に富みながら、その忌憚のなさが人をいらだたせるといったその人間性は、近づく人すべてを常に圧倒せずにはおかなかった。チェーホフは何事も誇張することのなかった人だが、それは催眠術だと言つたし、また無神論者ゴーリキーは語つた。「私は彼を見、そして思つた。この人は神に似ている、と」

トルストイの同時代人のうちで、最も聡明であり、最も懐疑的な人びとでさえ、彼の前に出ると、その驚くべき生命力、威厳、さらには人間的な温かさにつきかり魅せられてしまふのだつた。作家ローザノフはトルストイの作品を好まず、完膚なきまでにやつつけていたのだが、「流行に従つて」トルストイを訪れ、その訪問から帰つて、気も動転したようにこう書いている。

「彼に会つたとき、私は、まさに予期していたものを見る思いだつた。それは一つの自然、〈アルプスの巨峰〉⁽¹⁾だつた。トルストイの人格、そこそが本質であり、ロシア民族は挙げて彼のなかに体现されている」

若いころ、レフ・トルストイの自己評価は決して甘くなく、自己嫌惡に陥ることもあつた。彼は自分がひどい醜男で不器用だと思ひ、兄セルゲイの魅力と優雅さをねたんでいた。事実、そのころのトルストイには何か唐突で鋭利す

ざるもの、人を寄せつけない無骨さがあつた。ペテルブルクの社交界でも、三年間勤めた軍隊でも、彼は友人をつくらなかつた。とはいへ、若いころから、彼の氣難しい激しい性格と仮借のなさにもかかわらず、彼の魅力にとらわれる人はあつた。セヴァストポリ包囲戦から帰還したトルストイを一時世話したことのある優しい巨人ツルゲーネフは、彼は耐え難く、しかもあらがい難い、と評して、アンネンコフにこう書いてゐる。

「あの男が、どんなに魅力があり並はずれた男か、君には想像もできないだろう。もっとも、野暮な熱中しやすさと水牛みたいな頑固さがあり、僕は〈穴居人〉とあだ名をつけてやった。僕があつた男を思う氣持ちはちょっと奇妙でい**(2)**わば父親のように彼を愛しているのだ」

天駆ける鷲

雑誌『現代人』⁽¹⁾の編集者で、トルストイの初期の作品を出版した詩人ネクラソフは書いてゐる。

「なんたる魅力、なんたる知性の持ち主か！ とともにいて快く、エネルギーにあふれ、度量が大きく、まさに鷹だ！⁽³⁾いや、鷲だらうか！」

鷲——それこそまさに、その自己矛盾、攻撃的性格を克服した晩年のトルストイが、彼を訪れる人すべてに与えた印象だつた。一九〇一年、クリミヤのガスバラで病床にあつたトルストイの許を足繁く訪れたチエーホフは「途方もなく大きな人。〈ジュピター〉、他の人間の上を天駆ける鷲」と、書いた。

チエーホフ同様、マクシム・ゴーリキーもトルストイに会いにガスバラへ足を運んだ。最初、彼は警戒的な態度をとつてゐた。平民対貴族、浮浪民と領主、自己に懐疑的な若い作家と有名な『戦争と平和』の著者、そしてマルクス主義者とトルストイズムの創始者という対立意識があつたのだ。彼はこの老大家と意見の衝突を繰り返して、自分の文体と無神論を手厳しく批判されたが、それでも翌日になるとまた出かけて行く。彼はいらだちと幻惑を交互に感じな

がら、年輪を重ねたその顔に今なお情熱をたぎらせて、人の意表を衝く独特な激しい言葉でそのものずばりの疑問をぶつけてくる、このあらがひ難い話し手に耳を傾けるのだった。そして彼もついに、この老人の青みがかった灰色の鋭い眼の催眠術にかかつてしまったのである。「あれほど雄弁な眼を見たことがなかった。それは無限に変化するまなざしを持っていた」⁽⁴⁾

トルストイのこの磁力の正体は何か。チェーホフは言う。

「レフ・ニコラエヴィチと話していると、自分の全身全霊がとらえられているように感じる。私は彼以上に、人の魂を強くひきつける人に会ったことがない……」

この老いた叛逆児には人をひきつける力があつたのだ。しかしゴーリキーはさらに、その力の正体を見極め、説明しようとしている。トルストイとの会話は常に彼のなかに、新奇な「不可思議な、二度と忘れられない」感覚、感動を生じさせた。「自分の心のなかを腹藏なく開いて見せることによって、彼は飽くことのない好奇心をもって、相手にもそれができるよう勇氣づけていた」⁽⁵⁾

トルストイはあることわざの裏をかいた。それは——御多分に漏れず、大して味のあるものではないが——どんな偉人でもその身辺に仕える召し使いにとつてはただの人にすぎないということわざである。スリッパをはいたトルストイ、バケツの水を捨てるトルストイの姿は、見る人に深い印象を与えた。彼の子供たちや家人——彼の思想に同調せず対立していた人びとでさえ——は、自分がある並はずれた人、一種の超人の傍らで生きているのだという確信を抱いていた。そうした印象はあまりに強く、そのために、彼の身辺にいた人びとはほとんど皆、彼にならって日記や覚書をつけていた。そして彼らはそこで自分のことよりも彼のことを、常にトルストイのことを語っている。トルストイに突然浮かんだ考えだけでなく、彼のきげんの良し悪し、辛辣な批評、ささいな気まぐれに至るまで、それらを記録するのが自分たちの義務だと心得ていたかのようである。

妻のソーニャ(ソフィアの愛称)に関してはまだうなずける。彼女は夫がかけてくれた優しい言葉、夫の腹痛、気ま

ぐれ、体操、オランダ語、蜜蜂の飼育、アスバラガス栽培、テニス、サイクリングと次々と対象の変わった夫の熱中などすべてを、四〇年間忠実に書き付けていた。ところが、この偉人に関するこのようなささいな事実やしぐさまで書き留めておくという偏執は、彼の友人たちにも共通しているのである。たとえば、アニストのゴルデンヴェイゼル、孫たちの家庭教師だったスイス人クエス、そして一九一〇年映画芸術の将来に関する驚くべき論考を書いた学生、ブルガーコフに至るまでの代々の秘書たちなどである。

こういった内輪の回想録作者のなかで最も感動的なのは、チェコ人の医者マコヴィツキーで、彼はトルストイの人柄にひかれるあまり、一九〇五年以後ヤースナ・ポリャーナに移り住んでいた。彼は自分の記憶力を信頼せず、この有名な患者が目の前で語ることを、ポケットのなかで厚紙にやみくもに書き付けておき、夜になると自分の部屋で一人になってから心をこめて清書したという。

〈秘密〉の日記

トルストイの子供たちもまた父親に関するノートを取り、そして父親の書いたものはどんなささいなものでも保存しておいた。それによって三人の息子たち、セルゲイ、イリヤ、レフは父親の死後、それぞれ回想録を出版したが、少なくともも前の二人の証言は今でもある程度の価値を保っている。三人の娘、タチヤーナ、マリヤ、アレクサンドラたちはといえば、彼女たちはめいめいがつけていた『日記』のなかで自分こそが愛する父親のいちばんのお気に入りであることを示そうと競っているような観がある。それは〈秘密〉の日記ということになっていたが、彼女たちは互いにこっそり盗み見したり、声を出して読み合ったりした。一八九九年、タチヤーナの夫となったミハイル・スホーチンは、すでに五十を越えていたが、日記をつける偏執はこの穏健中庸の常識人にも伝染した。彼は教養もあり聡明でチエスの名人だった。その『日記』にはトルストイのチエスのさし方——彼はチエスでも負けを認めたがらなかった！

——政治的談話、家族と弟子たちとの板ばさみで苦しむ姿が客観的で穏やかな、優雅な筆致で書き付けられている。

トルストイの長女、一八六四年生まれのタチャーナが、一八七八年から一九一九年までの間に書いた日記は、それとは全く趣きが異なっており、そこには天真爛漫さと、真心あふれる熱情的な誠意がにじみ出ている。三五歳で結婚するまで、常に付き従っていた父親の巨大な人格の支配下にあったタチャーナは、日記のなかでは奇妙なある種の魅惑を伴う、自分自身との闘いに身を任せている（この点において、彼女は父親とよく似ている）。彼女はその恵まれた若い娘としての生活と社交界の楽しみ事が好きである一方で、同時に、敬愛する父親の教えに従い、彼の心を占めているものを分け持ちたいと思うのである。つまり、この伯爵令嬢はトルストイ主義者たらんとしたのだ。

彼女は冬の間、モスクワで魅力的な青年たちとダンスをするが、夏にはヤースナヤ・ポリャーナで農婦たちとともに干し草づくりをする。観劇に夢中になり、若い男たちのお愛想に喜んで耳を傾け、絵画を習い、バラライカを弾き、そして新しい靴やドレスを選ぶことを「いやらしく、また快い」ことだと思う。彼女はもちろん自分の精神を啓発し、善をなしたいと思う。しかし、二十歳の娘にとって、極端な父親の教理のことごとくに、文字どおり——それが彼女に父親が要求したことだった——従うということとは、どんなに難しいことだろう。例えば一八八五年、父親にいきなり次のように言われて、どうして反発せずにいられようか。「おまえにとつては、部屋を整頓しスूपをつくることのほうが、よい結婚をすることなどよりずっと大切なことだ」⁽⁶⁾

ちなみに、トルストイは娘たちの結婚には常に反対していた。嫉妬深い父親であり、眼の前に現れる候補者をすべて排除し、そしてタチャーナには女の結婚生活を破廉恥極まる地獄のように語り聞かせた。彼女もときに結婚を夢みることがあったとしても——例えばあの愛すべきチェーホフと——どんな夫でもこの偉大な父親には比肩するわけがないと自らに言い聞かせて、そのいまわしい誘惑を急いで払いのけるのだった。何年もの間、彼女にとって理想の夫とは父親であった。「パパがいるかぎりどうして結婚などできようか。もし結婚したらパパとのきずなが切れてしまいかもしれない。それがとても怖い」。六人の子持ちの男やもめであったスホーチンとの長い親密な交際の後に、とう

とう結婚を決意したとき、日記にこう書いた。「パパを裏切って恥かしい。でも後悔はしていない」

一方、嫉妬深い父親はなかなか気持ちと和らげようとしなかった。そしてこう書いた。「ターニャはスホーチンと行ってしまった。いったいなぜだ。情けなく屈辱的だ」

タチャーナの記事は、彼女と父親との関係の日々の記録である。初めのころの、ナイーヴでお茶目な少女は、無邪気さを保ちながらも、次第に聡明で果敢な女性に成長していった。彼女はしばしば父親の秘書を務め——彼女に取って代わられた母親は大いに不満だった——父親の心を占めている宗教的、社会的な問題の多くをともしにしていたのであるが、しかし彼女は、妹アレクサンドラが後にそうなるような、父親の盲目的、狂信的な弟子ではなかった。

彼女はしばしばトルストイ主義に従いはするが、反発的、反抗的であり、また、母親が「うさんくさい人たち」と呼んでいたトルストイの弟子たちとは折り合いが悪く、自分自身の考えを固持した。いろいろな人の考え方を聞くのは好きで、夏の夕べ、テラスで何時間も議論を戦わせる、兄弟姉妹、従兄弟、友人たちの集いにはすすんで参加した。彼女が父親に寄せる感情は賛嘆と献身以外の何ものでもなかったが、母親に対しても憐憫の混じった深い愛情を抱き、両親の間の口論にはいずれかの肩を持つようなことはせず、極力二人をなだめようとした。

未発表の原稿

今日われわれがここに出版する、タチャーナ・スホーチナ「トルスタヤの文章は、『父の死とその家出について』と題するすぐれた論考と、何年も前にロシアで刊行された『思い出すまま』の幾ページかを除けば、ロシア語でさえも未発表のものである。常に門戸を大きく開け放って一生を生きたトルストイという天才の人格に今なお魅せられている世界中の数多くの人びと、そして、その人格は決して完全には規定されえないということを知っている人びとにとって、これらのテキストは非常に大きな価値を持っている。そこには、弟子たちが描いたような（天啓を受けたモー

ゼ」のイメージからも、また中傷者たちが描く〈偽善と傲慢の怪物〉というイメージからもかけ離れた、親しみやすい良き父親としてのヘトルストイ主義ぬきのヘトルストイが見出されるだろう。それは聖画でも戯画でもない、一つの家庭のアルバムである。

このアルバムに収められた四つのテキストは、一見ふぞろいのようなだが、実際にはそれらは一つのまとまりであり、つまり、レフ・トルストイをモデルにした一冊の私的な写生帳にほかならない。作家のさし絵入りの伝記のように、ページを繰ってゆくうちに読者の眼前に彼の姿が彷彿と浮かび上がってくる、これはそういう書物である。

第一章『幼年時代』では、タチャーナは子供部屋から見たトルストイ——父なる神、聖ニコラ、魔法使いマリーリンが重なり合ったトルストイの姿を軽い筆致で描いている。第二章『少女時代』では、笑わせ、泣かせ、愛情で温かく包む姿が見られる。『父の死とその家出について』では語り口はよりまじめになり、六四歳になったタチャーナが、相互の愛情で固く結ばれた長い歳月の後に、ついに両親を決裂させるに至ったドラマをよみがえらせ、その真相を理解し、そして真情からくるすばらしい明晰さでわれわれに説明しようとする。『思い出すまま』では、まだ何か言い残したことがあるように感じている老婦人が物思いにふけりながら、もうとくに忘却の彼方に埋もれてしまったものと思った過去の出来事が、脳裡に浮かんでくるのにわれながら目を見張っている。

タチャーナの日記が、その日そのときの気分に従って、いわばへはやはやの状態で書かれているのに対し、これらのテキストは、筆者が思索と夢想の時間、そして焦点を合わせるのに必要な距離をおいて書いたものである。一九一〇年一月の父親の死後も、彼女は父の思い出に生きつづけ、翌年四月六日にはこう書いている。「ほとんど一日中、パパのことを思い、書き、そしてパパについて書かれたものを読んでいる。でもそれに関しては何も言わない」いわゆるヘトルストイ主義者」たちによって書かれたそれらの文章のなかには、彼女を憤慨させるものもあった。

一九一三年ごろ、彼女が回想録『幼年時代』『少女時代』を書きはじめたのも、事実を復元し、真実の父親の姿を提示するため、そして、いつの日かそれを読むことになるであろう娘ターニャのことを考えてのことであった。

その後も彼女は常に父親のことを考えつづけ、証言しつづけた。彼女の思索の第二期にあたる一九二〇年代の末に、彼女は『父の死とその家出について』を書き、出版する。それは、彼女自身序文で述べているように、トルストイについてのいくつかの証言——とりわけチェルトコフのそれ——、明らかに嘘偽りではないにしろ「真実でない真実は私たちの悪いものはない」というゴーゴリの言葉を裏書きするようないくつかの証言に反駁するためだった。『思い出すまゝ』は、純粹な思い出の時期、あえて言えばへただ楽しみのために、思い出に浸る第三期の作である。そこでは、破産し亡命した老婦人が、生活のためにロシア人形をつくりながら、心穏やかに父親のことを、娘ターニャの言葉によれば「母の生涯の男性」だった人のことを思いつづけている。

〈パパ〉トルストイを描く

これらのテキスト全体から浮かび上がってくるのは、生き生きとした親しみやすいトルストイ、一家の父という知られざるトルストイの肖像である。外部の人にとっては〈アルプスの巨峰〉、そしてスヴォーリンが「ロシアには皇帝が二人いる。ニコライ二世とレフ・トルストイだ」と書いた偉人も、娘にとってはただの〈パパ〉にすぎない。あるときは優しく、あるときはいかめしく、人並みはずれ、打ち沈むときもおどけるときもある、貴族でありまた一介の百姓でもある、そんな父親だった。

この忘れ難い父親のことを、タチヤナは限らない愛情と、心を溶かす天真爛漫さ、そして父親から受け継いだユーモアをもつて語っている。ルソー流の大原則を掲げるこの教育者が、自分が与える数学の授業に娘がついてこないと言つて真つ赤になって怒っているし、また、合理主義を奉ずるこの哲学者が、自分の乗った馬の前を黒猫が横切つたと言つてわざわざ遠回りする姿が描かれる。小説家トルストイが〈思わぬささい事〉と呼んでいた、彼のこのような小さな癖はまことにはえましい。〈アルプスの巨峰〉は影を潜め、第二の皇帝は消え去り、親しみの持てるあ

りきたりの人間が姿を現す。

ヤースナヤ・ポリャーナでは、写真が非常にもてはやされていた。ソーニャも写真には目がなく——われわれにとっては幸運にも——何百枚もの写真を撮り、まるで聖画のように自分の寢室の壁に貼りつけていた。われわれはそんなから未発表の数枚を含む一六枚ほどを選んでこの本を飾ることにした。さて、タチャーナのほうは、思い出を写真に撮る。それはポーズをとる時間も与えず、ソフト・フォーカスも使わない。逆光を浴びた写真も、近すぎる距離で撮ったのも、すべて一緒にくたに見せてくれる彼女のやり方は、いかにもばか正直で、一種の不器用ささえ覚える。パパが子供たちに遊びを考え出してやっているところ。しかつめらしい顔をしたイギリス人の女家庭教師。パパがピアノを弾いているところ。キルギス産の馬を調教している。農夫たちと話している……いつもパパがいる。

よみがえる往時のロシア

こうした思い出に混じって、『戦争と平和』のロストフ家を思わせる、領主一家の生活の模様が描かれる、この時代のロシアは数十年の月日にも泰然として変わりが無い。子供たちの教育は家庭で行われる。トルストイと妻が自ら、毎日何時間も外国語やピアノ、そのうえ種々の草木やきのこの名前を教える。社交界から遠く離れてはいても、娘たちは夜になるとランプの下でバリの最新のモード雑誌を読む。その傍らではママがネガフィルムを乾かしている。両親からは人生をいかに生きるべきかを学び、女中たちのあけすけなおしやべりからは実際の世の中を知り、そして村の白痴女の口走る奇妙な真実に耳を傾ける。チェーホフにおいて田舎貴族の生活は退屈のあまり死にそうだと言うが——彼は果たして実際そうした生活を知っていたのだろうか——、ヤースナヤ・ポリャーナの大きな白塗りの家では、人びとはよく笑い、充実した生活を送っていた。

その背景にあるのは往時のロシア、人が生まれ、死に、そして四季が移り変わってゆくだけの、一八七〇年代のロ

シアである。その後目まぐるしい速度で歴史の彼方に埋もれてしまったロシアを、タチヤーナはよみがえらせてくれる。それは時間がいかなる意味も持たず、ただ空間だけが途方もない重みを持っていた時代である。というのは、そのころ、その空間は、人間や馬の足で測られていたからだ。全能の官僚機構と警察組織に早くも骨抜きにされ、もはや自己の果たすべき役割を信じられなくなった貴族階級の支配下にあるロシア、祖国の伝統と本質に魅せられつつも同時に西洋文明に否応なくひきつけられるロシアだった。そして、その西洋はロシアが気付かぬうちに、ロシアを資本主義化せようと企てていたのである。

タチヤーナ・トルスタヤの未発表の原稿——『幼年時代』と『少女時代』——の執筆された経緯は語られる価値がある。そして筆者の娘ターニャ以上によくその務めを果たせる者があろうか。ターニャ・アルベルティーニスホーチナは語っている。

「これらの原稿が書かれたのは、一九一二年または一三年、だから祖父の死後まもなくです。^(?)書き進むにつれて、母には記憶がよみがえってきました。『幼年時代』の後が『少女時代』でした。

一九一七年、ロシアは大混乱に陥り、方々で家屋敷の略奪がありました。母はヤースナヤ・ポリヤーナも同じ運命に遭うのではないかと思い、母のいけばんだ大切なもの、つまりこれらの原稿を含む書類を鉄の箱に入れて庭に埋めました。幸い、私たちの家は略奪を免れましたが、書類は土のなかに埋まっている間にひどくいたんでしまい、原稿は箱から取り出して見ると湿気でインクがにじんでいました。でも判読することができたので、母は全部書き写しました。私はこの原稿を二つとも持っています。最初のは古いロシア語つづりで書かれ、二番目は（それで書かれた時期が推察できる）革命後すぐ採用された新しいつづりで書かれています……

母はその回想録を出版することを拒み通しました。そのなかで〈彼〉のことより自分のことのほうを多く書き過ぎたと思っていたからです」

タチヤーナの娘が長い遠巡の後に、彼女だけが内容を知っていたこの回想録の出版を許可することに踏み切った